

創世記・出エジプト記 通読

2月



(2月 1日)「創世記 8 : 15~22」

主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。

(創世記 8 章 21 節)

- ・ようやくノアたち家族と動物たちは、箱舟の外に出ることができました。雨が降り始めたのはノアが 600 歳の時の第二の月の 17 日、地が乾ききったのが 601 歳の時の第二の月の 27 日ですから、一年以上彼らは箱舟の中で過ごしたことになります。
- ・箱舟から出たノアが最初にしたのは、「祭壇を築く」ということでした。辺りを探索するのも住む場所を確保するのもなく、真っ先に神さまを礼拝するのです。
- ・「焼き尽くす献げ物」の煙は、「宥めの香り」として神さまの元に届けられます。その香りを嗅ぎ、神さまは「生き物をことごとく打つことは、二度とすまい」と誓われます。ノアの無垢な思いが通じたのでしょうか。

(2月 2日)「創世記 9 : 1~7」

神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちよ。」
(創世記 9 章 1 節)

- ・神さまは、創世記 1 章 28 節で最初の人に「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」と語られました。そして今回、ノアと息子たちを祝福しながら、そのときとほぼ同じ言葉を語られます。
- ・なぜ「地を従わせよ」という言葉がなくなったのかはわかりませんが、一つ重要なことがあります。それは、この時から肉食が認められたということです。そのため、獣も鳥も魚も人間を恐れることとなります。ただし「血抜き」はしなければなりません。
- ・また人の血を流す者は、その報いを受けるということも合わせて語られます。その理由は、「神は人を神のかたちで造られたから」です。人の血を流すということは、神さまの姿を傷つけるということと同じことです。「神の似姿」を大切にしましょう。

(2月 27日)「創世記 16 : 1~2」

サライはアブラムに言った。「主はわたしに子供を授けてくださいません。どうぞ、わたしの女奴隷のところに入ってください。わたしは彼女によって、子供を与えられるかもしれません。」アブラムは、サライの願いを聞き入れた。

(創世記 16 章 2 節)

- ・この時代に、跡取りを得るということは大変重要なことでした。しかし同じような考え方が、日本でも最近まで（今でも？）ありました。男の子が生まれたら大喜びする。家を守るために婿養子をとる。
- ・また子どもが生まれないのは、女性の責任だと考えることも普通でした。だからサライは自分の責任を感じ、アブラムに女奴隷ハガルのところに入るように願うのです。
- ・子孫を残し、土地や財産を相続させることは、正しいことだと考えられていました。ですからアブラムがハガルの元に入っても、姦淫とはならなかったようです。ただこの提案をせざるを得ないサライの心は、大変複雑だったことでしょう。

(2月 28日)「創世記 16 : 3~6」

アブラムはハガルのところに入り、彼女は身ごもった。ところが、自分が身ごもったのを知ると、彼女は女主人を軽んじた。
(創世記 16 章 4 節)

- ・サライの提案どおり、アブラムは女奴隷ハガルの元に入り、ハガルは身ごもります。しかしこの妊娠によって、3 人の関係が変わっていきます。まずハガルがサライを見下すようになりました。
- ・子どもが出来るということは、神さまの祝福のしるしだと考えられていました。ですからハガルの気持ちも、わからないではないです。サライはアブラムにハガルの態度について訴えると、アブラムは「好きなようにするがよい」と答えます。
- ・このアブラムの態度、どうでしょうか。もう少し責任感のある返答は、なかったのでしょうか。サライは本当に、好きなようにしました。その結果、ハガルは逃げ出します。3 人の態度は、どれも愛のないもののように感じます。

(2月 25日)「創世記 15 : 12~16」

主はアブラムに言われた。「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。

(創世記 15 章 13 節)

- ・神さまが夢の中で語り掛ける場面は、聖書によく見られます。アブラムは夢の中で、自分の子孫の未来について知ることになります。ただし自分自身は、良き晩年を迎えて葬られ、安らかに先祖のところに行くと言われていきます。
- ・この夢が「出エジプト」のことだと、ユダヤの人たちはすぐに気が付くでしょう。アブラムの子孫が 400 年の間奴隷としてエジプトに仕えること、そのエジプトを神さまが裁かれること、そして多くの財産を携えてエジプトから出てくることを神さまは告げるのです。
- ・この夢はアブラムに対して予告をするという意味合いよりも、出エジプトの出来事が神さまのご計画であることを強調します。すべては神さまによる救済の歴史なのです。

(2月 26日)「創世記 15 : 17~20」

日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。

(創世記 15 章 17 節)

- ・昨日のアブラムの夢の場面は、「日が沈みかけた頃」の出来事でした。今日の箇所は「日が沈み」から始まるので、アブラムが眠った時間はそれほど長くなかったようです。神さまがアブラムを無理やり眠らせた、ということでしょう。
- ・「煙を吐く炉と燃える松明」という具体的な言葉が出てきますが、その中に燃える「炎」は神さまの臨在のしるしだと考えることができます。出エジプトの「火の柱」や使徒言行録の聖霊降臨の物語でも、炎が想起させられます。
- ・神さまはこれらの出来事によって、アブラムと契約を結ばれました。言葉だけではなく儀式を通して、「土地を与える」という約束が締結されたのです。しかしこの聖書の記述によって、たくさんの民族が苦しめられているという事実も忘れてはなりません。 14

(2月 3日)「創世記 9 : 8~17」

すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。

(創世記 9 章 13 節)

- ・神さまは、契約を立てます。その契約の相手はノアとその家族だけではなく、すべての子孫、そしてすべての生き物も含まれます。つまり神さまは、今これを読んでいるわたしたちとの間にも、契約を結ばれたということになります。
- ・この契約は、「片務契約」と呼ばれます。一般社会の契約は「双務契約」と呼ばれ、甲と乙、どちらとも義務を遂行しなければなりません。それに対して「片務契約」は、どちらか片方だけが一方的に約束を守るという契約です。
- ・神さまの決意は、「これから先、滅ぼさない」というものです。どれだけわたしたちが神さまに背いても、そのように約束してくださいました。虹は空に向けた弓のようにも見えます。神さまが約束を破ったら、ご自分に向けて矢を放つという決意とも取れます。

(2月 4日)「創世記 9 : 18~23」

セムとヤフェトは着物を取って自分たちの肩に掛け、後ろ向きに歩いて行き、父の裸を覆った。二人は顔を背けたままで、父の裸を見なかった。

(創世記 9 章 23 節)

- ・箱舟から出たノアとその家族は、新たなスタートを切ります。農夫だったノアは、ぶどう畑を作りました。一から畑を再生していく作業は、600 歳を超えたノアにはつらかったのではないのでしょうか。
- ・彼はぶどう酒を飲み、酔って天幕の中で裸になりました。今だったら笑いで済まされるかもしれませんが、「裸になる」という行為自体がまず、非難されるべきことだったようです。
- ・さらにもう一つ、非難されることがありました。それは他人の裸、特に親の裸を見るということでした。イスラエルの人々の間では、その行為は親を侮辱することであり、罪であるとされていました。そのためセムとヤフェトは後ろ向きに歩いたのです。

(2月 5日)「創世記 9 : 24~28」

ノアは酔いからさめると、末の息子がしたことを知り、こう言った。「カナンは呪われよ 奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。」

(創世記 9 章 24~25 節)

- ・昨日の箇所では、ノアはぶどう酒に酔い、天幕の中で裸になりました。それを見たカナン（祖先）であるハムは外にいた兄弟、セムとヤフェトを呼んで裸のノアに衣服を掛けました。ところがこの行為を知ったノアは激怒します。
- ・セムとヤフェトが自分の裸を見なかったのに対して、ハム（カナン）は見てしまいました。このことでノアは怒り、カナンを呪うことになります。いくら父の裸を見るのが罪だと言っても、ハムが気づいてくれなかったら風邪をひいたかもしれないのに、勝手なことです。
- ・ハムの子孫であるカナン人が住む場所は、後に「約束の地」としてアブラハムに与えられます。セムの子孫はイスラエル人とされますので、この聖書の記述がイスラエル人とカナン人の敵対関係の起源だということができます。

(2月 6日)「創世記 10 : 1~5」

海沿いの国々は、彼らから出て、それぞれの地に、その言語、氏族、民族に従って住むようになった。

(創世記 10 章 5 節)

- ・創世記 5 章には、アダムからノアまでの系図が書かれていました。そしてこの 10 章には、ノア、そしてその息子セム、ハム、ヤフェトの系図が書かれます。イスラエルの人々がいかに系図を大事にしていたかが分かります。
- ・最初に登場するのは、ヤフェトの系図です。順番的にはセムからが自然なのですが、なぜかいつも 3 番目に書かれるヤフェトが一番です。彼の子孫は小アジアや地中海方面の諸民族となったそうです。
- ・子孫の中には、土地の名前にもなっている名前も登場します。たとえば「タルシシュ」は、ヨナ書 1 章 3 節に出てくる、ヨナが神さまから逃れようとした場所です。

(2月 23日)「創世記 15 : 1~6」

アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」

(創世記 15 章 2 節)

- ・アブラムには、まだ子どもがいませんでした。この時代、子孫が与えられるということが神さまの祝福だと考えられていたため、アブラムの心中は複雑だったことでしょう。
- ・弟のナホルや甥のロトも一緒に住んでいないため、アブラムの財産を相続するのはエリエゼルでした。彼は使用人（聖書では家の僕）でした。神さまに対してアブラムが言った言葉には、「どうして子どもを与えてくれないのですか」という嘆きも含まれています。
- ・神さまは以前、地の塵の数ほどアブラムの子孫を増やすと約束されました。そして今回は、星の数のように子孫が増えると約束します。そしてアブラムは、その言葉を信じました。これが「アブラムの義」なのです。

(2月 24日)「創世記 15 : 7~11」

アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」

(創世記 15 章 8 節)

- ・昨日の箇所では、アブラムは自分の子孫が星の数のように増えると告げられたことを、そのまま信じました。しかし神さまが、「あなたに地を与えて継がせる」と言われた言葉に対しては、しるしを求めます。
- ・アブラムは雌牛、雌山羊、雄羊、山鳩、鳩の雛のうち、鳥以外は真ん中で二つに切り裂いて向かい合わせて置きました。このように動物を向かい合わせて置くのは、古代中近東の契約のやり方だったようです。
- ・アブラムにそれらの動物を用意するように命じたのは神さまです。つまり神さまは、土地を与えるという約束について、アブラムと契約を結ぼうとされるのです。アブラムははげ鷹（新しい聖書では猛禽）を追い払いながら、その時を待ちます。

(2月 21日)「創世記 14 : 13~16」

アブラムは、親族の者が捕虜になったと聞いて、彼の家で生まれた奴隷で、訓練を受けた者三百十八人を召集し、ダンまで追跡した。

(創世記 14 章 14 節)

・旧約聖書の中には、戦いが多く出てきます。現代を生きるわたしたちにとって、それらの記述は目を背けたくなるものです。「戦いに勝利すること」＝「神の祝福」という図式を、わたしたちがそのまま受け入れるのは大変危険だと思えます。

・以前アブラムと別れて歩むことになった甥のロトは、ソドムの人たちと共に捕虜になっていました。アブラムは彼を取り戻すために、318 人の従者を動員して追っていきました。

・その人たちは、普段から訓練されていたようです。やはり物騒な世界です。遊牧民であったアブラムは寄留する土地の人と契約を結び、放牧をおこないました。その契約の中には、「外敵から守る」ということもあったのでしょう。

(2月 22日)「創世記 14 : 17~24」

いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクも、パンとぶどう酒を持って来た。

(創世記 14 章 18 節)

・アブラムがロトを取り戻して帰って来たとき、ソドムの王とサレムの王メルキゼデクがやって来ました。サレムとはエルサレムのことです。またメルキゼデクは「いと高き神の祭司」とも書かれています。

・メルキゼデクのごとは、新約聖書のヘブライ人への手紙にもこのように記されています。「メルキゼデクという名の意味は、まず「義の王」、次に「サレムの王」、つまり「平和の王」です。(ヘブライ人への手紙 7 章 2 節)」

・彼は、祭司の血族であるレビ族以外の者でありながら、アブラムから十分の一を受け取り、アブラムを祝福しました。そしてイエス様も、メルキゼデクと同じ「いと高き神の祭司」であるとヘブライ書は書きます。イエス様はユダヤ教の枠組みを乗り越えられるのです。

(2月 7日)「創世記 10 : 6~20」

カナン人の領土は、シドンから南下してゲラルを経てガザまでを含み、更に、ソドム、ゴモラ、アドマ、ツェボイムを経てラシャまでを含んだ。

(創世記 10 章 19 節)

・次にハムの子孫です。彼の子孫の名前の中には、エジプト、カナン、ラマ、シェバ、バベル、アッシリア、ニネベ、ペリシテ人、エブス人、アモリ人、そしてソドム、ゴモラなど、聖書の他の箇所に出てくる地名や民族が多くみられます。

・そしてその多くは、あまりいい意味で用いられていません。エジプトはイスラエルの民を奴隷として扱いました。バベルはバビロニア(バビロン)のことで、イスラエルの民はこの国に捕囚として長い期間連行されました。

・ハムの子孫たちがイスラエルの民と対立しているのは、ハムがノアの裸を見たからだと言明します。そしてノアの「カナンは呪われよ 奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ」という言葉を、ユダヤの人たちは今も信じているから、争いが絶えないのです。

(2月 8日)「創世記 10 : 21~32」

ノアの子孫である諸氏族を、民族ごとの系図にまとめると以上のようなになる。地上の諸民族は洪水の後、彼らから分かれ出た。(創世記 10 章 32 節)

・最後にセムの系図が書かれます。セムはノアの三人の息子の長男なのに扱いが低いようにも感じますが、そうではありません。セムの系図は 11 章 10 ~26 節に改めて書かれます。そのときには年齢などもあわせて書かれていますので、やはり「本家」なのでしょう。

・日本でも、織田信長の末裔とか、先祖が源頼朝だとか、そのような方がおられます。また宮内庁が公開している「天皇系図」は、紀元前 660 年に即位した神武天皇がスタートとなっています。

・聖書に書かれているのは、それよりずっと前のことです。なお聖書は、すべての民族がノアからスタートしたと語ります。文字通り信じるかどうかは別として、神さまの祝福がわたしたちを含むすべての民族に与えられていることを覚えましょう。

(2月 9日)「創世記 11:1~4」

彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。(創世記 11 章 4 節)

- ・ここから物語は、「バベルの塔」に入ります。有名な物語なのですが、今日と明日のたった 9 節で完結します。「ノアの洪水」の物語とは随分ボリュームが違います。
- ・人々はみな、同じ言葉を用いていました。聖書の記述によれば一人の人から民族が分かれたと考えられていたので、当たり前と言えども当たり前です。そして彼らはレンガを使うことが出来るようになったのを機に、高い塔を建てようとします。
- ・当時、神さまは天におられると考えられており、メソポタミアにはジグurat というレンガを用いた巨大な塔も建てられていました。神さまの訪れる場所として建設されていたようですが、バベルの塔にはそれだけではなく「名を上げる」という目的もありました。

(2月 10日)「創世記 11:5~9」

こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱(バラル)させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。(創世記 11 章 9 節)

- ・「高い塔を建てて名を上げよう」という人間の思いは、神さまによって打ち砕かれました。「人間が無謀にも神さまに並び立とうとした」物語は、わたしたちに大きなインパクトと教訓を与えてくれます。
- ・言葉によって相手に自分の思っていることが伝わらなければ、一緒に物事を進めることができません。逆に言えばわたしたち人間は、お互いに関わり合い、助け合いながらでないと生きていけないということを伝えているのかもしれない。
- ・また「自分たちは神さまより偉大だ」と考えてしまう傲慢さも、神さまは否定されます。科学の発達などで、目に見えないものは信じられないという人もいますが、神さまの前に謙虚になって、目に見えないものに目を向ける気持ちも必要なのではないのでしょうか。

(2月 19日)「創世記 13:14~18」

あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。

(創世記 13 章 16 節)

- ・ロトが去った後、アブラムは神さまからの約束を聞きます。それはその地を、アブラムとその子孫に与えるというものでした。アブラムはすでに 75 歳を過ぎていましたが、まだ子どもはおりませんでした。
- ・それでも神さまは、「あなたの子孫を大地の砂粒のようにする」と語ります。アブラムの耳には、その約束はどのように聞こえていたのでしょうか。
- ・その言葉を聞いた後、アブラムは天幕を移し、マムレの櫛の木のそばに来て住み、祭壇を築きます。どこに行ってもまず、神さまを礼拝することを大切にします。常に神さまに心を向けるアブラムの姿を、わたしたちも見習いたいと思います。

(2月 20日)「創世記 14:1~12」

ソドムに住んでいたアブラムの甥ロトも、財産もろとも連れ去られた。

(創世記 14 章 12 節)

- ・突然地名と王様の名前が列記されて戸惑いますが、この時代においても国同士で争いが起こっていたということが書かれています。しかも「連合国」のような形で、国同士が結びついたりしています。織田につくのか、今川につくのか、どうする？ということでしょうか。
- ・この時代、戦いに敗れると悲惨な状況が待っていました。財産や食料はすべて奪われ、また連行された人は皆、奴隷にされます。ソドムとゴモラの王は穴に落ちてしまい、戦いに敗れてしまいます。
- ・ソドムというと、アブラムと別れたロトが住んでいた場所でした。戦いに勝利した人たちは、ソドムとゴモラの財産や食料をすべて奪い取ります。その中には、ロトとその財産も含まれていました。どうする？アブラム。

(2月 17日)「創世記 13 : 1~7」

アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きました。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた。

(創世記 13 章 7 節)

- ・聖書は人間の弱さや醜さを、隠すことなく描いていきます。アブラムとロトは叔父と甥の関係でした。彼らの財産は非常に増えていきます。その結果、それぞれの家畜を飼う者たちの間に、争いが生じたということです。
- ・旧約聖書の時代、財産を得ることは神さまの祝福だと考えられていました。つまりアブラムとロトには、神さまの祝福が与えられていたと思われていたのです。ところがそのために、争いが起こったということはどういうことなのでしょう。
- ・祝福を受けているからこそ、他者に寛容にありたいと思っていれば、彼らは争うことなどないのです。家畜を飼う者たちと、アブラムやロトとの考え方は違うかもしれません。しかしどこかに、自分たちは特別だという思いもあったのでしょうか。

(2月 18日)「創世記 13 : 8~13」

アブラムはカナン地方に住み、ロトは低地の町々に住んだが、彼はソドムまで天幕を移した。

(創世記 13 章 12 節)

- ・アブラムとロトは分かれて暮らすことを決意します。ロトはアブラムの甥ですので、アブラムの方が年長者です。ですからアブラムは、好きな土地を選ぶこともできたでしょう。しかし彼は、ロトに好きな方を選ばせました。
- ・アブラムは神さまに命じられ、故郷を離れカナンの地にやってきました。ただただ神さまの言葉に信頼を置く、それがアブラムの信仰でした。「信仰の父」と呼ばれるアブラムは、ここでも必ず神さまに守ってもらえるという確信があったのかもしれません。
- ・ロトが選んだのは、低地の「主の園」のように見るととても良い地でした。しかし彼が天幕を移したそばにあるソドムには、とても邪悪で罪深い人々が住んでいました。ソドムの物語はまた後ほど出てきます。

(2月 11日)「創世記 11 : 10~26」

セムの系図は次のとおりである。セムが百歳になったとき、アルパクシャドが生まれた。それは洪水の二年後のことであった。(創世記 11 章 10 節)

- ・聖書はここでまた、系図に入ります。今度はセムの系図です。10 章 21 節以降にある系図と見比べると、少しずつ違っているのが分かります。まずどちらか片方にしか登場しない人の名前が見受けられます。
- ・またどちらかという、今回の系図に登場する人たちの方が丁寧に書かれているように思います。何歳で子どもをもうけたか、そして何歳まで生きたかということが書かれているからです。6 章 3 節で人の寿命は 120 年になったはずなのに、とも思いましたが。
- ・また系図の最後にテラが登場します。彼はアブラム、ナホル、ハランをもうけます。このアブラムは、イスラエルの人々にとってとても重要な人物です。ノアからアブラムに物語が移行していくことを、この系図は示しているのです。

(2月 12日)「創世記 11 : 27~32」

テラは、息子アブラムと、ハランの息子で自分の孫であるロト、および息子アブラムの妻で自分の嫁であるサライを連れて、カルデアのウルを出発し、カナン地方に向かった。彼らはハランまで来ると、そこにとどまった。

(創世記 11 章 31 節)

- ・「テラの系図は次のとおりである」と始まる今日の箇所には、これから先にも登場していく重要な人物が何名か出てきます。アブラム、ナホル、サライ、ロトなどです。
- ・この名前を見て、「あれ？アブラムとサライではなく、アブラハムとサラじやなかったっけ？」と思う方もおられるでしょう。彼らの改名については 17 章に出てきますので、お楽しみに。
- ・ここで気になるのは、アブラムの父テラがすでに家族を連れて、生まれ故郷であるカルデアのウルを出発してカナンに向かったことです。彼らはハランまで来て、そこに住みました。神さまがアブラムに「わたしの示す地に行け」と言われた場面は有名ですが、その父もすでに故郷を離れていたのです。

(2月 13日)「創世記 12 : 1~3」

わたしはあなたを大いなる国民にし あなたを祝福し、あなたの名を高める祝福の源となるように。

(創世記 12 章 2 節)

- ・パウロはガラテヤの信徒への手紙 3 章 8 節で、「聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、『あなたのゆえに異邦人は皆祝福される』という福音をアブラハムに予告しました」と書きます。
- ・このパウロの言葉は、今日の箇所にある神さまの言葉が元になっています。ユダヤの人々はこの神さまの言葉を、自分たちイスラエルの民への約束と捉え、自分たちは選ばれた民だと信じました。
- ・しかしパウロは、この約束は全人類に対するものであると考えます。アブラムを通して始められた人類への救いの計画は、「地上のすべての氏族」に対してのものだったのです。

(2月 14日)「創世記 12 : 4~6」

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。

(創世記 12 章 4 節)

- ・奈良基督教会では、75 歳になると教会委員への被選挙権がなくなります。つまり簡単に言うと、75 歳が定年だというわけです。しかしアブラムは、75 歳の時に新たな道を神さまに示されました。
- ・アブラムは 175 歳まで生きたそうですから、まだこの時は人生の折り返し前とも言えます。しかし長年暮らしてきた場所を離れ、寄留者として知らない土地に行くことには、大変な勇気と決断が必要だったことでしょう。
- ・しかしアブラムは、神さまが告げられたことに従い、家族を連れて出かけます。そこには他に、何も書かれていません。アブラムは、ただ神さまの言葉を信じたのです。これがアブラムが、「信仰の父」と呼ばれる所以です。

(2月 15日)「創世記 12 : 7~9」

主はアブラムに現れて、言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。

(創世記 12 章 7 節)

- ・神さまはアブラムに、「わたしはあなたの子孫にこの地を与える」と約束されました。そのためこのカナンという土地は「約束の地」と呼ばれることになってしまいます。
- ・その土地には、カナン人が住んでいました。カナン人はハムの子孫ですが、ノアは息子のハムに自分の裸を見られたことに怒り、「カナンは呪われよ 奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。カナンはセムの奴隷となれ」と言いました。
- ・だからセムの子孫であるアブラムは、カナン人が住んでいる土地であろうとも与えられる権利があるのだという論法は、かなり強引のように思います。そしてそこに祭壇を築く。カナン人からすると、気持ちのよいことではなかったでしょう。

(2月 16日)「創世記 12 : 10~20」

ところが主は、アブラムの妻サライのことで、ファラオと宮廷の人々を恐ろしい病気にかからせた。

(創世記 12 章 17 節)

- ・アブラムは約束の地カナンに入りますが、その地に飢饉が起こります。そこで彼らは、エジプトへと下っていきます。37 章以降のヨセフ物語の中でも、エジプトは作物が豊富な土地として描かれます。ナイル川の恵みはそれほどすごかったのでしょうか。
- ・エジプトに近づいたときアブラムは、妻のサライに「妹」と名乗るように言います。これと同じような物語は聖書の他の箇所にも見られますし、聖書以外にも伝えられています。
- ・サライはアブラムより 10 歳年下でした。アブラムは少なくとも 75 歳ですから、サライも 65 歳以上ということになります。そしてそもそもウソをついたのはアブラムなのに、ファラオに神さまの怒りが下されるのは少しかわいそうにも思います。